

エコツアー報告～国立環境研究所見学に参加して～

川本悠月 (かわもと ゆづき / 2022年度インターン生)

昨年11月末に、国立環境研究所を見学させて頂き様々なお話を伺った。その中でも特に印象に残ったことを三つ紹介する。

一つ目は、社会システム領域における研究についてである。「マスメディア報道と世論調査」について、地球環境問題に関する報道があれば世界で最も重要な問題が環境問題であると考える人々が増加する一方で、報道が少ないときには人々の関心も薄くなるというものがあった。12月会報で増井氏がおっしゃっていたことでもあるが、マスメディアの報道がいかにか重要で、世論の声をも握っているかを改めて認識することができた。

二つ目は、民間航空機を利用した、大気中の二酸化炭素濃度やメタン濃度の分布測定である。両手で持てる大きさの瓶を飛行機に乗せ、飛行中にジェットエンジンの傍から大気を回収するという画期的な観測方法を紹介して頂いた。飛行機を用いて大気を回収することで、三次元での大気観測が可能であり、これは世界初の試みで、この業績に対し、毎日新聞社の国際環境賞を受賞したとのことだ。飛行が始まると自動的に大気を回収できる点や、飛行機という既存のものに工夫を加えることで重要なデータを収集できる点が非常に魅力的であった。

三つ目は、スーパーコンピューターによる気候変動将来予測に関する研究である。これは、物理法則などによって地球環境変動メカニズムを予想するものであり、例えば、大気を小さい箱（日本の周りを観測する際は5km）で敷き詰め、箱内のエネルギー上昇度をスーパーコンピューターで計算することができる。テレビや雑誌等によく見る、○年後

には気温が○度上昇するといったような温度の分布図はこのようにして計算されたものだ。自分の想像をはるかに超える大きさで、気象庁にあるものよりも小さいと聞いたときには驚いた。

他にも、海洋プラスチックの研究や、土壌のCO₂測定、気候変動適応センターの役割などを紹介して頂いた。このようなデータの採取、そしてその発信は地球温暖化対策や、脱炭素に向けた行動を考えていく上で重要な指標となり、教育にも繋げていくべきものである。見学をしている中で、自分自身、あまり意識してこなかった、こうしたデータの観測・発信の重要性に気づかされた。

未来の地球を守る、私たちの生活を守るために様々な分野の専門家が研究を重ね、データを表示し、役立つ情報を発信している。私たちにできることは、それらから得られたことを最大限に活かし、日々の生活に反映していくことである。そのために、こうした情報に積極的にアクセスし、個人にできることは何か、周りに伝えられることは何かを考えていきたい。

土壌から放出・吸収されるCO₂観測